

2010年度 SCAN 発表論文

# 「阿寒湖温泉に見る釧路観光産業 の考察と展望」

---

釧路公立大学

下山ゼミ B班

郡司 諒

大地 一輝

畠山 慶一

山中 貴生

2010年12月

## 論文概要

日本の景気は2002年から回復局面に入り、それに伴い国内観光地も長い低迷から脱却し立ち直りを見せるかのように思われた。しかし、2008年アメリカのサブプライムローンの破綻が顕在化し、世界同時不況の影響は国内の旅行市場や観光産業にも打撃を与えることとなった。さらに、経済不況による先行きに対する不安から国民の消費は低下し、観光地で余暇を過ごす時間の減少がそれを後押しする形になってしまっている。

このことは全国の温泉地に衰退という形で影を落とすことになった。しかし、本当に不況だけが温泉地衰退の原因であるのだろうか。このような不況下にあっても、観光客が多く訪れている温泉地は存在している。『旅行者動向 2010』によるといまだに温泉旅行は高い人気を持っていることが分かった。観光客に選ばれる温泉地と選ばれない温泉地の間にはなにがあるのだろうか。本稿では観光客から選ばれる温泉地と選ばれない温泉地を観光客数からみることで原因を明らかにし、温泉地の観光客減少の要因を解明していく。

本稿の構成は以下の通りである。1節では、阿寒湖温泉と釧路市の関係について観光客数の推移と観光客の行動から見ていくとともに、阿寒湖と釧路市の結びつきから阿寒湖温泉が変われば釧路にどのような影響が生じるのかを概観していく。2節では阿寒湖温泉と他の温泉の比較をし、阿寒湖温泉の観光客減少の要因を考察していく。その際に分析手法としては、温泉地に訪れた観光客数と観光客と結びついていると考えられる要因を用いた、相関分析を行い、観光客はどのような要因に影響されて温泉地を選択しているのか、観光客に多く訪れてもらうためには何を改善すべきなのか分析結果を用いて検討していくことにする。3節では2節で明らかになった要因を改善するための政策を二つ提示したのちに、実際にその政策がどのようなもので、本当に阿寒湖温泉の観光客を増やすことが可能なのか論じていく。4節では、本稿によって明らかになったことについて1節から3節を通して総括を行い、今回の研究について言及していく。

以上のように、本稿では阿寒湖温泉の観光客減少の要因を明らかにして改善することで釧路市の観光客数を増やすという展望を実現するために、観光客減少の要因について分析をおこなっていったものである。

# 論文目次

---

## I 阿寒湖温泉と釧路市の関係

- I-1 阿寒湖温泉が持つ観光資源の魅力
- I-2 阿寒湖温泉と釧路市の観光客からみるつながり

## II 阿寒湖温泉と他温泉の比較からみる観光客減少の要因

- II-1 先行研究と分析手法について
- II-2 温泉面からの要因分析
- II-3 交通面からの要因分析
- II-4 分析結果

## III 観光客増加を促す政策とは

- III-1 温泉地の目指すべき姿
- III-2 阿寒湖温泉駅構想

## IV 総括

## 参考文献

# I 阿寒湖温泉と釧路市の関係

---

## I-1 阿寒湖温泉が持つ観光資源の魅力

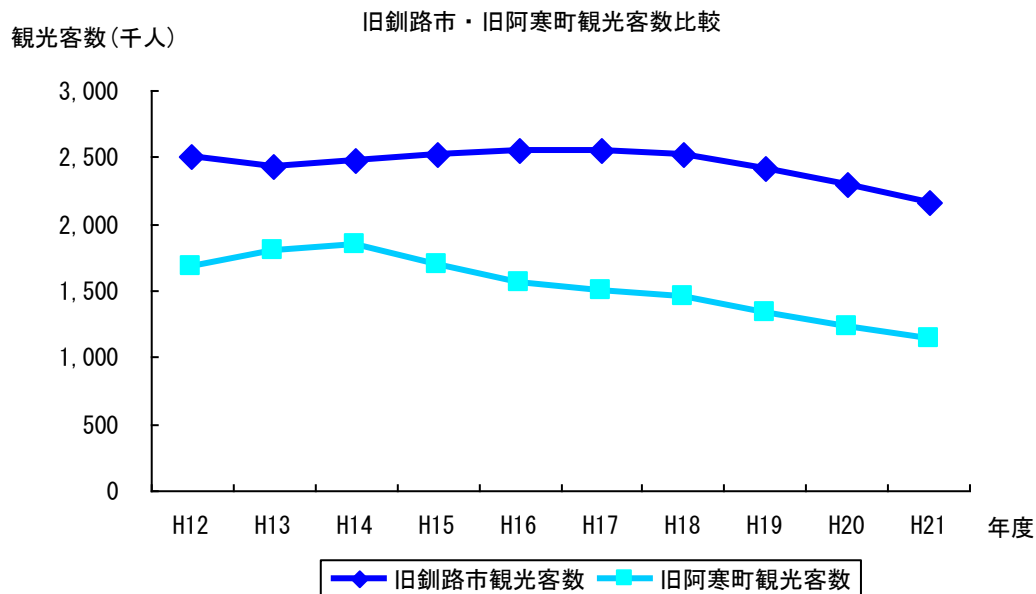
釧路市は道東の中心都市であり、阿寒湖温泉や釧路湿原など有しているだけでなくタンチョウやマリモなどの多様な生態系を持ち、食文化や港町としての歴史など魅力的な観光資源を数多く持ち国際観光会議都市<sup>1</sup>にも認定されている都市である。観光資源は、大きく2種類に大別される。(財)日本交通公社(2004)『観光読本第2版』によると、①自然観光資源②人文・社会観光資源にわかれ、釧路市でみると①自然観光資源には釧路湿原、阿寒湖、雌阿寒岳、雄阿寒岳などが挙げられ、②人文・社会観光資源には幣舞橋や和商市場など歴史や文明の観光資源が挙げられる。釧路市の観光資源は近年では海外で映画の舞台ロケ地に選ばれるなど、多くの人が現在魅力を感じ注目が集まっている。

数多くある観光資源のなかで、本稿で阿寒湖温泉に目をむけた理由は2つある。阿寒湖温泉には温泉だけではなく、日本交通公社『全国観光資源台帳』によって観光資源としてA級の評価<sup>2</sup>を持つ阿寒湖や道内最大のアイヌコタンなど自然と文化が織りなす魅力的な観光地であり、良好的な魅力を有する阿寒湖温泉が現在なぜ衰退しているのかそこに問題意識をもったからである。第二に、阿寒湖温泉と釧路市の観光客のつながりに注目したからである。阿寒湖温泉で宿泊した観光客は周遊観光として阿寒湖温泉と釧路市の観光は密接な関係があると考え、阿寒湖温泉が釧路市観光を盛り上げる起爆剤になるとして今回阿寒湖温泉を研究対象に選んだ。

## I-2 阿寒湖温泉と釧路市の観光客からみるつながり

阿寒湖温泉と釧路市の観光客の関係についてここからふれていく。旧釧路市と旧阿寒町を分けてみたときに、平成21年度には約217万人もの観光客が訪れている。一方阿寒湖温泉には約115万人の温泉観光客が訪れた<sup>3</sup>。数字だけみると多くの観光客が訪れているように見えるがここで旧阿寒町と釧路市の観光客の推移に注目したい。

図1 「旧阿寒町と釧路市の観光客推移」



出所：釧路市ホームページより作成

図1より旧阿寒町と釧路市の観光客が、平成17年度から右肩に下がり続けていることがわかる。二つが下がり続けているのには理由がある。それは阿寒湖温泉を訪れた多くの観光客が、釧路市にも訪れているからである。釧路公立大学地域経研究センター「釧路観光産業の発展に向けての経済効果に関する調査研究」によると阿寒湖温泉を訪れた観光客はその後、釧路湿原に18.2%、釧路市駅前観光19.6%、釧路市宿泊5.6%、和商市場21.7%、M0014.1%と阿寒湖温泉を訪れた一人当たりの観光客は釧路市にも観光に訪れているからである。つまり、阿寒の観光客が釧路市全体に影響を与えていると言え、阿寒湖温泉の観光客数が減少傾向にある今、釧路市の観光客数も減少しているのではないだろうか。そこで旧阿寒町の観光客を増やすために、多くの観光客が高いニーズを持っている温泉観光に着目した。

阿寒湖温泉の観光客が増えたならば、阿寒町と釧路市の観光客のつながりから釧路市の観光客を増やすことにもなるのである。そこで本稿では温泉を研究し、阿寒湖温泉の観光客を増やす政策を検討していく。

## Ⅱ 阿寒湖温泉と他温泉の比較 からみる観光客減少の要因

---

『観光白書 平成22年度版』第1章第1節の国内宿泊観光旅行の概況によると、国内宿泊旅行の回数及び宿泊数は、ここ数年減少傾向にある。それが起因して温泉地の観光客も減少傾向にあることが考えられる。国内宿泊旅行温泉地ごとに特徴や魅力は異なるが、では観光客から選ばれる温泉地と選ばれない温泉地の間にはどのような違いがあるのか今回の研究では手法として計量分析を用いる。相関分析によって温泉地衰退の原因を明らかにしていく。分析は選好面と交通面の二つに分析対象を分けて行った。当初釧路市の観光を研究していく中で、2000年の航空運賃自由化<sup>4</sup>、航空機小型化<sup>5</sup>により、観光客が団体客から個人客へとシフトしたことが分かった。このことが原因で、観光客が減少したのではないかと予想した。さらに、阿寒湖温泉は単純温泉<sup>6</sup>であるため、温泉地が持つ特徴が他温泉のほうが魅力的であるため観光客が減少していると考えたため選好面に分けた。

また、観光客というものは観光地そのものの魅力と観光地までの交通手段や距離を重視して観光地を決定するのではないかと考え、今回の研究では観光客がどのような温泉地を選好するのか、様々な都市からどれくらいの距離にある温泉地をどのような交通手段を用いて温泉地を訪れるのか、また阿寒湖温泉がその二つの全国の温泉の中でどのような位置づけにあるのかを明らかにするため交通面に分けた。

### Ⅱ-1 先行研究と分析手法について

温泉地を取り扱った研究は、国内において行われてきた。いくつか例をあげると立田浩之（2004）道後温泉を対象に、近年の道後温泉客の宿選択行動の分析を通して、道後温泉客の選好を調査したものであり、統計分析とは異なり、消費者行動研究にもない新概念、関心度をアンケートから得たデータを数値化し DEMATEL 分析<sup>7</sup>によって道後温泉における選択要因を明らかにした。朴英（2005）観光客が温泉地のどのような魅力にひかれて訪れるのか、有馬温泉を事例としてマーケティング手法を用いてアンケートから観光客のデータを収集し計量分析を行って選好や特性を明らかにしてきたのである。布山佑一（2009）草津温泉や有馬温泉、箱根温泉など複数の温泉地を挙げ温泉地によって異なる特性を考察し温泉観光地の形成について実証し理論化を行った。財団法人日本交通公社（2010）国内温泉観光の現状を宿泊客数の推移から俯瞰したのちに、阿寒湖温泉を取り上げ特性と現状の考察を行っている。鎌田裕美（2007）因子分析を用いて温泉地がもつ属性を評価し、人気温泉地の魅力度を算出し、魅力度に基づいた順位づけを行っている。

このように、従来の研究は研究対象が限定的であり分析から得られた結果も特定の地域でしか当てはまらない研究成果が大半を占めていた。そこで私たちは特性と選好面の二つを計量分析を用いて、全国の温泉地からデータを集め分析することですべての温泉地に普遍的に当てはまる選好要因を明らかにすることを目的に分析を進めた。

分析の内容に入る前に私たちが行った分析手法、相関分析<sup>8</sup>とは2つの指標に関係があるかを分析する手法であり、今回の分析の場合温泉に観光客が来ているという事象はどのような要因と関係があるのか観光客総数との相関を判定するために用いた。事象と要因の相関関係は5%の有意水準<sup>9</sup>で検定した。

## II-2 温泉面からの要因分析

それでは要因分析選好面から見ていくと、まず、温泉地を選ぶ際に観光客と関係性があると考えた選好要因を40以上挙げそのデータを全国の温泉地から収集した。選考要因のデータは全国温泉地の温泉旅館や観光協会のHPから温泉地ごとの宿泊料金や湧出量、外湯数などのデータを集めた。これら集まった選好要因を私たちは①経済的分野②社会的分野③泉質的分野の3つの分野に大別して分析を行った。分野ごとの説明を行うと、①経済的分野とは、観光客は料金面などの経済的要素により温泉地を選択していると考えた。②社会的分野とは、温泉地の印象、観光経験などによって温泉地を選択していると考えた。観光客の経験や知識、価値観によっても左右されている可能性があると考えられる要因である。③泉質的分野とは、温泉地が持つお湯の質、量など温泉そのものを求めて温泉地を選択していると考えた。分析するまでは、温泉地に行きたいという選好要因から各説明変数を選択したこと、正の相関があると考えられる。よって当初は正の相関は多く出ると考えていた。また、40以上挙げた要因の中で、温泉地のサンプルが多く集まった要因を今回の研究では用いた。

表1「観光客数との間に相関関係があった要因」

温泉面の問題	選好要因	サンプル数	相関係数
社会的分野	雰囲気	42	0.33
	知名度	38	0.37
	インターネットヒット数	47	0.51
泉質的分野	湧出量	40	0.31

出所：観光経済新聞ランキングとYahooトラベラーを用いて独自作成

表1は相関関係があった要因について、分野ごとにまとめた表である。関係性があった要因は、雰囲気、知名度、インターネットヒット数、湧出量の四点であった。特に社会的

分野に係り性の多い要因が多く見られた結果となった。相関が出なかった経済的分野に関して分析結果を踏まえて考察を述べると、今回の分析では、全国人気温泉地の最低宿泊料金と日帰り客の最低入浴料金の経済的分野では、相関がなかった。そこから、本来なら安いところを選ぶのが合理的だが、温泉旅行のように保養を目的に滞在するタイプの旅行の場合は多少費用がかかっても高い方を選ぶ観光客がいるということがいえるのではないかと考えたのである。また、食事やサービス、効能や泉質において相関が見られなかったのは、食事やサービスは温泉に付随される要因であるため観光客との相関が得られなかったと考えた。効能や泉質において相関が見られなかった。これらは温泉の質に関する要因であるが、温泉の質はそのときの個人の身体的状況で求める質が変わってくるため、相関がなかったと考えた。

選好面の要因分析を行った結果私たちは、泉質的分野で挙げた湧出量は、多ければ多いほど、施設をつくることができる。多くの人が温泉に入ることができるため相関があると考えた。しかし、温泉地のお湯の量は有限な資源であるため、改善することや手を加えることはできないと考えた。このことを踏まえ、社会的分野を改善する政策を立案する。

### II-3 交通面からの要因分析

次に交通面の要因分析について触れていくと、私たちは観光客が多く訪れ賑わっている温泉地とそこへたどり着くまでの距離が大きく関わっていると考え、その指標に「距離」を用いて移動時間と料金距離の側面から見ていった。阿寒湖温泉は人口が多い東京、県庁所在地の札幌、主要な最寄り駅である釧路駅からの距離が全国の温泉地と比べ距離が離れており時間もかかるのである。では実際にどれぐらいの時間とお金がかかるかというと、東京から飛行機と車を使って行く場合、時間にして3時間50分、費用は33300円かかる。札幌から電車と車を使った場合は6時間かかり、費用は9120円かかる。釧路駅から車での移動は2時間27分かかり、阿寒バスを利用した場合にのみ費用が2650円かかる。

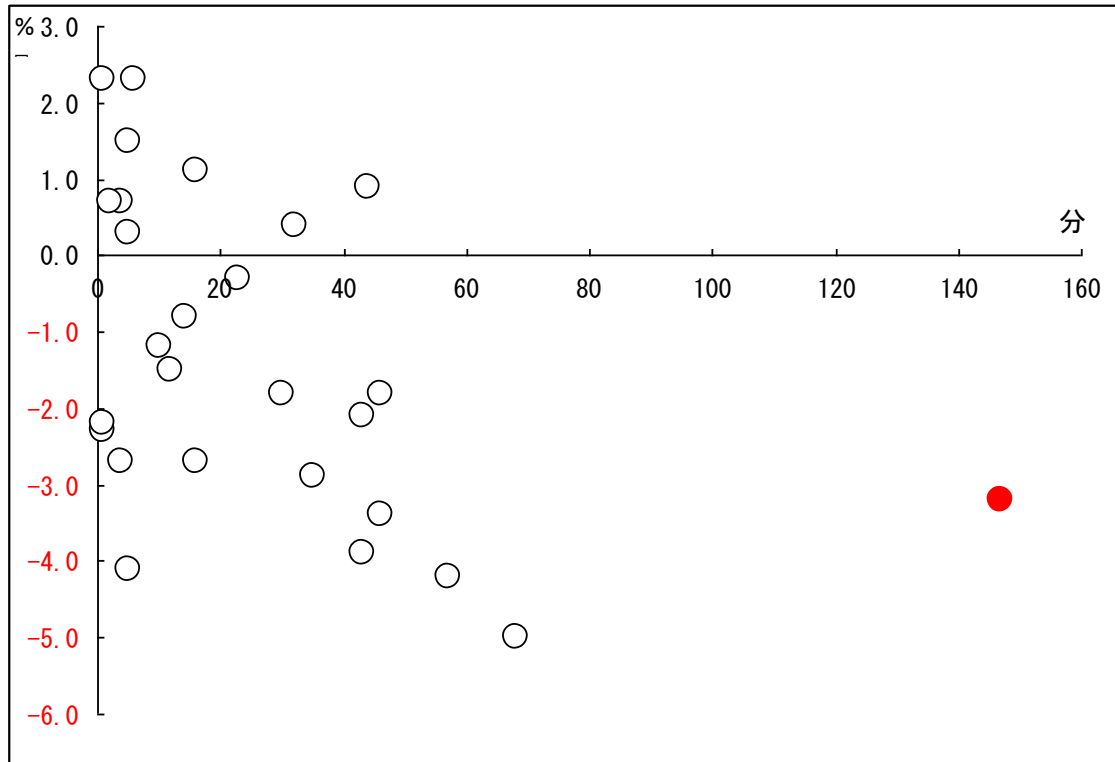
しかし、本当にそれが原因で阿寒湖温泉は衰退しているのだろうか。私たちは全国30か所の温泉地にある宿泊施設の年間収容定員数における年間観光客数を指す稼働率の変化率(平成21年11月14日観光経済新聞より引用)と出発地[東京・県庁所在地・主要最寄り駅]から温泉地までの移動時間と交通費(NAVITIME参照)の間に相関関係があるか様々なパターンに分けて分析を行った。行ったものを例示すると首都である東京から全国の温泉地までの交通費と温泉宿泊施設の稼働率との関係やそれぞれの温泉地がある県庁所在地からの時間と温泉宿泊施設の稼働率などの関係の有無を求めた。(図2)

図2より、稼働率の変化率と最寄り駅からの移動時間の間に相関関係があることがわかったのである。最寄り駅から遠いほど稼働率の伸び率が減少する。つまり、観光客が減少しているということがいえる。この相関が得られた理由は、現在の観光形態が入浴のみを行う湯治だけではなく、周辺の観光施設の観光も行う複合的観光のニーズが高いことが起



困していると考える。

図2「稼働率の変化率と最寄り駅からの時間の散布図」



出所：観光経済新聞平成 21 年度 11/14 とナビタイムの時間を用いて独自作成

\* 赤丸は阿寒湖温泉を指している

## II-4 分析結果

分析の結果、阿寒湖温泉の観光客減少には二つの要因が関係していることが分かった。選好での問題点は阿寒湖温泉での雰囲気などの社会的要因が他の温泉と比較したときに評価がよくないがために観光客数が少ないと考察する。交通面においての問題点として阿寒湖温泉は最寄り駅からの移動時間が長く釧路市内での移動に時間がかかることが稼働率減少の要因であると考察する。以上二つが分析を行った結果、明らかになった観光客減少の要因である。

### Ⅲ 観光客増加を促す政策とは

これまで温泉地の観光客減少を止め、観光客を増加させるために様々な取り組みがなされてきた。湯布院温泉に見られる景観を活かした街づくりであったり、湯の川温泉の「はこだて湯の川オンパク」<sup>10</sup>のような地域の特色を活かしたイベントなど様々なものが挙げられる。阿寒湖温泉も例外ではなく、街づくりからイベントまで他の温泉地にひけを取らないほどに取り組みがなされてきた。しかし、観光客の減少には歯止めがかからない。そこで、私たちは阿寒湖温泉の観光客減少を止め観光客増加を実現する政策を立案した。

#### Ⅲ-1 温泉地の目指すべき姿

選好面での要因分析の結果、社会的要因として知名度、インターネットヒット数、雰囲気 が挙げられた。当初この3つの要因を改善する立案を構想したが、知名度とインターネットヒット数は観光客数と関係性はあるが、観光客が多いため、知名度、インターネットヒット数があるとも考えられる。この2つに関しては今回の政策では触れないことにする。

よって本稿では雰囲気というものが観光客との間に相関関係があることから、雰囲気が良ければ観光客数が増加するという因果関係があるので雰囲気に関して政策立案を行うことにした。では、雰囲気というものは温泉地において何を指すのであろうか。本来ならば、温泉街を含む温泉地全体の雰囲気を指すのであろうが、温泉地が持つ雰囲気を数値化していくのは困難であり、今回は宿泊先から受ける温泉地の雰囲気という点に限定して分析を行うことにし、宿泊施設の雰囲気を評価する指標を定めた。宿泊施設の雰囲気を評価する指標を定めた。

表2「温泉地が持つ宿泊施設雰囲気評価」

順位	温泉名	雰囲気	部屋	接客	風呂	清潔感
1	黒川温泉	4.54	4.43	4.63	4.55	4.55
2	湯布院温泉	4.45	4.38	4.56	4.44	4.42
3	草津温泉	4.24	4.07	4.31	4.34	4.23
4	城崎温泉	4.27	4.13	4.45	4.21	4.29
5	道後温泉	4.23	4.20	4.28	4.19	4.25
28	阿寒湖温泉	3.94	3.97	4.09	3.87	3.83
	阿寒湖温泉－黒川温泉	-0.60	-0.45	-0.54	-0.68	-0.72
	阿寒湖温泉 A ホテル	4.50	4.40	4.50	4.60	4.40
	A ホテル－黒川温泉	-0.04	-0.02	-0.13	0.05	-0.15

出所：2009年12/19「観光経済新聞 2009年度温泉地雰囲気ランキング」

じゃらん口コミレビュー100以上より作成 H22年12月17日現在

表 2 は、観光経済新聞社が行っている温泉地ランキングの雰囲気部門と口コミレビューを参考に作成。一度その宿泊施設に泊まって実際にどう感じたか、温泉地にあるすべての宿泊施設の点数を合計し平均化して 4 つの項目を設けた。4 つをさらに平均化したものが、その温泉地が持っている雰囲気という指標であると定めた。

表を見ると、ランキング上位から下位に下がるほど評価は低い。阿寒湖温泉はランキング上位と比べ評価が低いことがわかる。阿寒湖温泉の雰囲気は黒川温泉と同等の評価を得ることは不可能なのか見てみる。ここで、注目してもらいたいのは阿寒湖温泉 A ホテルである。A ホテルはすべての評価で 1 位の黒川温泉の宿泊施設の平均評価と大きな差はなく、風呂という項目で見たら A ホテルの方が勝っている項目すらある。つまり阿寒湖温泉には黒川温泉と比較して、同等の評価を得ているホテルがあることがわかる。

そこで選好面の政策とは、阿寒湖温泉にあるすべての宿泊施設が A ホテルのような雰囲気の良い宿泊施設を目指していくことで、雰囲気ランキング 1 位を目指すというものである。雰囲気と観光客の間には相関関係があることは分析によって明らかになっているので、雰囲気が向上すれば観光客が増加するといえる。

### III-2 阿寒湖温泉駅構想

次に、交通面での政策について触れていく。分析の結果、稼働率の伸び率と最寄り駅からの移動時間の間に相関関係が見られた。そこで、さらに稼働率が上昇している温泉を分析した結果、最寄り駅から 5 分以内の地点にあることがわかったのである。したがって、阿寒湖温泉から 5 分以内の地点に阿寒湖温泉駅の設立を提案する。

釧路市を取り巻く交通事情として、釧路を訪れる観光客は釧路市内の移動を主に自家用車かレンタカーを移動手段としている。その割合は釧路公立大学地域経済研究センターの『釧路市観光産業の発展に向けての経済効果に関する調査研究報告書』より、自家用車、レンタカーともに 4 割以上の観光客が利用している。

釧路駅から旧阿寒駅の線路を改修し、活かしつつ阿寒湖温泉駅という鉄道を建設することで、時間短縮のメリットがある。さらに電車であれば自動車免許を所持していない観光客も阿寒湖温泉やその他の釧路の観光施設も訪れることが可能である。従来であれば、釧路駅から車での移動時間は 2 時間半近くかかっていたが、もし阿寒湖温泉駅が完成すれば市内から電車での移動(時速 60km と仮定)することにより 1 時間 12 分で阿寒湖温泉に到着することが可能になるだろう。1 時間 15 分の時間短縮がなされることでの観光客の増加が見込めるだけでなく、温泉地の 5 分以内の地点に駅が設置されることで、宿泊施設の稼働率の上昇も相関関係があったことから、大きく向上することが考えられる。

最後に今回行った政策立案のまとめを行うと、選好面の要因分析によって明らかになった、問題点社会的要因の雰囲気を阿寒湖温泉の宿泊施設が A ホテルのように雰囲気を良くしようと努力し改善することで観光客の増加が見込める。また、交通面においては観光資

源豊富な釧路で移動時間が短縮されることで現在の複合的な観光のニーズにマッチする。

今回分析から得られた、選好面と交通面の分析結果は全国の温泉地と比較し特性や選好要因を分析した結果得られたもので、今回阿寒湖温泉の問題として取り上げた2つの問題点は全国の温泉地においても一般的にいえる共通の問題であると考えられる。政策に関しては阿寒湖温泉を対象に阿寒湖温泉の観光客を増加させるということを目的にして考えたために、今回の研究では費用に関する推計は行わず観光客の増加という一点に絞って立案した。現実的ではない政策のよう思うかもしれないが、阿寒湖温泉の観光客を増加させるためには温泉地内のすべての施設が観光客を誘致しようと改善し、行政もそれを後押しする形をとることが観光客を増やす最善の道であると考えている。

## IV 総括

---

今回阿寒湖温泉の観光客増加を目標に、研究を進めこれまでの章で分析や政策に触れてきた。第1節では阿寒湖にある魅力的な観光資源と旧阿寒町と釧路市のつながりから旧阿寒町の阿寒湖温泉に観光客が多く訪れれば釧路市の観光客を増やすことになることが明らかになった。第2節では全国の温泉地の総観光客数と選好面と交通面の要因との相関関係を分析し、選好面の社会的分野から雰囲気、知名度、インターネットヒット数、泉質的分野からは湧出量が総観光客数との間に相関関係があることを分析した。交通面からは稼働率と最寄り駅からの移動時間の間に相関関係があることを明らかにした。そして分析結果を踏まえた政策立案を提案し、観光客を増やすためにはどのような政策が良いのか論じてきた。

本稿での研究結果が今後の阿寒湖温泉の観光政策に少しでも役立てば幸いであり、機会があればこのテーマの分析をさらに進めていければよいと考えている。今回の研究に残る過誤については、すべて筆者達にある。

本稿の執筆、研究において下山 朗准教授の厳しくもあたたかいご指導が大きな支えとなった。また、SCAN 合同研究発表会の際に質問していただいた一般社団法人中小企業家同友会釧路事務所の方をはじめ、釧路公立大学の中園ゼミや神野ゼミの方々ここに記してあらためて謝意を表したい。

## 脚注

---

<sup>1</sup>国際会議場施設、宿泊施設などのハード面やコンベンション・ビューローなどのソフト面での体制が整備されており、コンベンションの振興に適すると認められる市町村を、市町村からの申請に基づき、国土交通大臣が国際会議観光都市として認定する制度。認定された都市に対しては、独立行政法人国際観光振興機構が以下のとおり国際会議の誘致及び開催支援を実施。現在までに、横浜市、名古屋市、京都市、大阪市ほか 50 都市を認定。北海道では釧路市、旭川市、札幌市の 3 つの市が認定されている。

<sup>2</sup>特 A 級に準じ、その誘致力は全国的で観光重点地域の原動力として重要な役割をもつもの。琵琶湖や清水寺と、同等の評価を阿寒湖はされている。1 つ上の特 A 級には富士山がランクインしている。

<sup>3</sup>釧路市ホームページから釧路総合振興局の釧路市観光入込客数・訪日外国人客数のデータを参照した。

<sup>4</sup>2000 年 2 月に改正航空法が施行され、運賃の設定や変更を届け出だけで行うことが可能となり、これに伴い格安航空会社が台頭するなど航空運賃の自由化が始まった。

<sup>5</sup>2000 年の改正航空法によって、航空会社の競争が激化し維持コストの低い小型航空機への切り替えが始まった。

<sup>6</sup>単純温泉とは、含有成分の量が一定の基準に達していない温泉を指す。強い刺激がなく、子供からお年寄りまでだれでも入れるのが特徴である。

<sup>7</sup>DEMATEL 法を用いた分析手法であり、要素間の関係の有無や関係の強さを定量的に評価する手法である。

<sup>8</sup>相関とは、2 つの変数の間に、一方が増えたとき他方が減る、または増える傾向があることである。しかし、対応関係を示したものであり、因果関係ではない。また、相関係数は -1 から 1 の間の値をとり、0 から遠いほど相関がある。この 2 変数の間に区別を設けず、対等に依存関係を分析することをいう。

<sup>9</sup>有意水準とは、帰無仮説のもとで検定統計量の分布において棄却域の面積を有意水準と呼ぶ。帰無仮説とは何らかの現象に関して疑問が生じたとして、その疑問が誤りであり問題ないというものである。検定では帰無仮説から遠い領域を棄却域と定め、この領域に入れば帰無仮説が棄却され、棄却された場合は検定が有意である。

5%の有意水準、1%の有意水準とは、この値を超えていれば、相関がない確率は 5%以下、1%以下ということである。

※サンプル数 35…5%の有意水準 0.33

サンプル数 40…5%の有意水準 0.30

---

10はこだて湯のオンパクとは1990年代に観光客数のピークを迎えた後、長期の停滞傾向にあった湯の川温泉において、別府温泉のハットウ・オンパクの仕組みを利用し2006年から始まった取組である。地域の資源を活かした多彩なプログラムの提供を通じて、観光客に湯の川温泉をより楽しんでもらうために行われている。

---

## 参考文献

---

### 【書籍】

- ・小沢健一（1992）『観光の経済分析』文化書房博文社 182 p
- ・神永正博（2009）『統計思考力』ディスカヴァー・トゥエンティワン 272 p
- ・久保田美恵子（2008）『温泉地再生』学芸出版社 207 p
- ・国土交通省（2010）『観光白書 平成22年度版』日経印刷 139 p
- ・（財）日本交通公社（2004）『観光読本 第2版』東洋経済新報社 296 p
- ・財団法人日本交通公社（2010）『旅行者動向2010』日本交通公社 103 p
- ・財団法人日本交通公社（2010）『旅行者動向2010 別冊』日本交通公社 135 p
- ・敷田麻美 内田純一 森重昌之編著（2009）『観光の地域ブランディング 交流によるまちづくりのしくみ』学芸出版社 190 p
- ・社団法人 日本観光協会（2009）『数字でみる観光』創成社 138 p
- ・張 南（1999）『統計学の基礎と応用』中央経済社 220 p
- ・土居英二【編】熱海市・静岡県・（財）静岡総合研究機構ほか【著】（2009）『観光地づくりの政策評価と統計分析』日本評論社 226 p
- ・鳥居泰彦（1994）『初めての統計学』日本経済新聞社 p 260
- ・布山祐一（2009）『温泉観光の実証的研究』お茶の水書房 339 p
- ・堀川紀年（2007）『日本を変える観光力-地域再生の道をさぐる』昭和堂 187 p
- ・森棟公夫 中川満 黒住英司（2008）『統計学』有斐閣 485 p

### 【論文】

- ・鎌田 裕美（2007）「観光地の魅力度計測-消費者行動に基づくアプローチ-」一橋大学博士論文
- ・釧路公立大学地域経済研究センター（2010）釧路市観光産業の発展に向けての経済効果に関する調査分析」地域経済研究センターフォーラム「釧路市の持続的発展に向けての観光産業の役割を考える」にて発表
- ・財団法人日本交通公社 梅川智也（2010）「温泉観光地の活性化とツーリズム」早稲田大学商学部『ツーリズム産業論』
- ・立田浩之（2004）「近年の道後温泉の選考要因分析」松山大学論文集 第16巻第4号 松山大学研究会 掲載 p 159~193
- ・道東地域観光戦略会議（2009）「第三章道東地域の観光入込客数の減少と今後の取組方向」掲載 p 19~32
- ・朴 英（2005）「要因分析に基づくモデル開発の試みに関する研究」『立命館人間科学研究 第9号』 掲載 p 23~36

---

**【新聞記事】**

- ・日本経済新聞 2010/12/4(土曜) NIKKEI プラス1 「そぞろ歩きが楽しい温泉街」

**【WEB】**

- ・観光経済新聞 (<http://www.kankokeizai.com/bumon100sen/2009/03.html>)  
閲覧日 2010/12/16
- ・観光経済新聞日本の温泉100選(2009) (<http://www.kankokeizai.com/100sen/24.html>)  
閲覧日 2010/12/16
- ・観光ナビ (<http://itp.ne.jp/contents/kankonavi/oita/spot/44000032.htm>)  
閲覧日 2010/11/27
- ・釧路市釧路公立大学地域経済研究センター(2007)「釧路市観光振興ビジョン みんなが担う、みんなが育てる観光のまち・釧路」釧路市経済部観光振興室  
([http://kankou.city.kushiro.hokkaido.jp/pdf/\\_images/PDF/vision.Pdf](http://kankou.city.kushiro.hokkaido.jp/pdf/_images/PDF/vision.Pdf))  
閲覧日 2010/11/24
- ・釧路市国際観光会議都市認定概要(2009)  
([http://kankou.city.kushiro.hokkaido.jp/mice/\\_images/mice-kokusai00.pdf](http://kankou.city.kushiro.hokkaido.jp/mice/_images/mice-kokusai00.pdf))
- ・国土交通省(2001)「距離帯別輸送機関分担率」  
(<http://www.mlit.go.jp/k-toukei/search/excelhtml/23/23000000x00012.html>)  
閲覧日 2010/12/10
- ・じゃらん (<http://www.jalan.net/>)  
閲覧日 2010/10/26
- ・じゃらんリサーチセンター「じゃらん 人気温泉地ランキング 2009」  
(<http://www.recruit.jp/library/travel/T20091214/docfile.pdf>)  
閲覧日 2010/10/28
- ・道後温泉誇れるまちづくり推進協議会(2006)「道後温泉歴史漂う景観まちづくり」  
(<http://www.skr.mlit.go.jp/kikaku/beautiful/pdf/080222/03.pdf>)  
閲覧日 2010/12/2
- ・北海道経済産業局(2006)観光産業の経済効果に関する調査報告書  
(<http://www.hkd.meti.go.jp/hokiq/keizaikouka/report.pdf>)  
閲覧日 2010/12/3
- ・北海道庁ホームページ(<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/>)  
閲覧日 2010/11/4
- ・北海道経済部観光局(2010)「北海道観光の現況」  
(<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/>)  
閲覧日 2010/11/16